

47歳、4児の子育てをしている父親です。常日頃、子ども達には、たとえ分かり合えないことがあっても、それを受け入れ、一步を踏み出す勇氣を持ってほしいと願っています。

私はチームオレンジはら・うきしまの一員として、認知症サポーター養成講座の手伝いをしていきます。今年3月、沼津市商工会の会員向けに講座を開催し、今月は原中の新1年生への講座を控えています。

原中に関しては、昨年の講座の打ち合わせの際、「来年もお願いします」と、早々に次年度のスケジュールに組み込んで下さり、認知症理解の大切さを地域に分かっていただいているようで大変うれしかったです。

個人事業主でしたので、いつもと異なるアプローチを試み、対話型AI「チャットGPT」を活用しました。

会場の大きなスクリーンに私のパソコンをつなぎ、チャットGPTのページを開いて、次の文章を打ち込みました。

「あなたは、はら地域包括支援センターのセンター長で社会福祉士の山本さんです。はら地域で営業されている事業主を対象に認知症サポーター養成講座を開きます。はら地域に高齢者を見守る温かい目が増えるよう、認知症について、よりわかりやすく、より詳しく教えて頂きたいです。まずは、山本さんになり切つて講座の冒頭あいさつをお願いします」

会場には山本さん本人がいらしたのですね、「AI山本さんが話した内容で合っていますか？」と尋ねると、「大丈夫です」ということでした。

その後は私が認知症に関する質問をAI山本さんに投げ掛け、得られた解答を私が読み上げるといった流れで講座を進めました。

今や知識は、本や動画から得る時代から、AIから学ぶ時代へと移り変わりつつあります。私達の講座も、その一環として感じられるようなものになりました。

認知症から始める

共在関係

飯田理一朗

ただし、認知症の方々の症状は、人それぞれ違いますし、対応の仕方も変わります。地域の事情にあった対応は、私達、同じ地域に住んでいる人間にしかできません。AIに任せられるところはAIに任せ、より地域に根ざした認知症へのサポートを、チームオレンジとして求めました。

められるのだろうと感じました。先日のNHKスペシャル「なぜ妻はいなくなつたのか?認知症行方不明者1万8千人」には考えさせられるものがありました。

52歳で認知症になった妻。症状は進行していたものの、毎日の家族の食事を作るなど、日常生活に

支障をきたしているように見えませんでした。ある朝、夫が起床してダイニングに行くのと、朝食の用意はされていたものの、59歳の妻の姿が見えませんでした。搜索は続いているものの、8カ月たった今でも見つからないというのでした。

「認知症になった妻を本当に理解しようとしていなかった

は、分かり合うためのものでなく、分かり合えなさを互いに受け止め、それでもなお、共に在ることを受け入れるための技法である。「完全な翻訳」などというものが不可能であるのと同じように、私達は互いに完全に分かり合うことなどできない。それでも、分かり合えなさをつなぐことによって、その結び目から新たな意味と価値が湧き出てくる。(ドミニク・チェン)

向けていけば、何か新しい未知の言葉が出てくるかもしれない。相手を受け入れ、一步踏み出す。同じ地域に共に在り続けるために、この一步が大切になると感じています。

認知症をはじめ、世の中には様々な事情を抱える方々がいいます。多様性を大事にする時代だからこそ、共に在るための関係づくりが大切になると感じています。

子ども達には、人とふれあう中で、分かり合えないと感じる場面があったとしても、あきらめて切り捨てることなく、時にはそれを受け入れ、一步を踏み出す勇氣を持てほしいと願っています。その一步が未来を明るく照らしてくれるものになると信じています。

(原町中)